

---

# 罪人

暴走魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罪人

### 【Nコード】

N7543P

### 【作者名】

暴走魔

### 【あらすじ】

普通の女子高校生テアはあることをきかっけに、人形スピネルと共に「罪人」となった。

無数にある恐ろしい都市伝説が現実となってテア達に襲い掛かる。

テアはその都市伝説を打ち消すために時の旅をする。

たくさんの犠牲を伴いながら・・・

## 家族の異変（前書き）

なんか意味わかんないけど読んでくれたら嬉しいです^^

## 家族の異変

凍りつくような寒さの夜。一人の少女は色を失った目で歩いていた。

「本当にいいんだね、テア」

「うん。だってもう後戻りはできないんだもん。」

そう。もう後戻りはできない……

12月24日。人としての私は死んだ。

いつもどおりの日常。それがどんなにありがたい事かこの時の私にはまだ理解できなかったんだ。

彼女の名前はテア。変わった名前だが日本人だ。テアは自分の名前がイヤで仕方がなかった。今時片仮名なんて誰でもイヤだろう。

テアは16歳の高校1年生。休み時間に1本の電話がかかってきた。

「もしもし……えっ、ミキが……!?」

それは妹のミキが小学校で倒れたということだった。

慌ててテアは保健室のドアを開けた。

「ミキっつー!!」

「あ、お姉ちゃん」

ミキはテアをみると、無邪気な笑顔で笑いかけてきた。

「あ、ミキさんのお姉さん? ミキさん、急に倒れて……。でも今は容態も落ち着いているから大丈夫よ。今日は家に帰ってゆっくりすることね。自宅に連絡したんだけど繋がらなくて……。両親は外出かしらっ。」

保健の先生は不思議そうに話した。

「外出? きいてないですけど「お姉ちゃん、早く帰ろっ!」

テアの言葉はミキに遮られてしまった。

「もうすっかり元気じゃない」

「じゃあお大事にね。」

「先生さよなら」

テア達の家はそんなに遠くなかったので2人で歩いて帰った。

「ただいま」

「おかえり。ってどうしたの？まだ2時よ」

テアの母、ミヨが驚いて玄関に走ってきた。

「ミキが今日学校で倒れて・・・迎えにいったの。」

テアがそう言うとミヨは力が抜けたように膝をついた。

「ミキあんたまさか・・・」

「大丈夫だって！お母さんが考えてるような事になってないよ。」

ミキは膝をついた母の手をとって立ち上がらせた。

「ちょ・・・何の話？それに外出してたの？今日」

そういうとますます青ざめた顔で、

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

と呟いた。

「お母さん、疲れてるみたいだから、向こうで休も。お姉ちゃんは学校に戻って。ミキは大丈夫だから。」

そういうとミキはミヨをつれて部屋に戻っていった。

「なんだったの・・・？」

テアは2人が自分に隠し事をしてしていると確信した。そして、言わな  
いからにはちゃんと理由もあるのだろうと思っていた。この時はち  
よっと気になるから探ってみよう、という感じだった。

「教えてくれないなら・・・自分で突き止めるだけよ。」

テアはそう呟いて学校に戻っていった。

こう思ってしまった事が罪になるとも知らずに・・・



## 家族の異変（後書き）

主人公のキャラはクールな美少女にするつもりww  
投稿遅めですが、また^^

## 大きな過ち

とある日のお昼。テアは屋上でお弁当を食べていた。

「最近のお弁当・・・冷凍食品が多いな・・・」

弁当はいつも母が作ってくれていた。本来なら、手作りのハンバーグやサラダで埋められている弁当が最近では温めてつめただけ、という物が多くなっていた。

「やっぱり・・・あの事が原因なのかな・・・」

テアは母達の隠し事を気にしていた。あれから2人ともよそよそしくてテアは不愉快だった。

「それも今日でおしまいにするわ!」

テアは弁当を包んで立ち上がった。テアにはある作戦があったのだ。

\*\*\*\*\*

「メリークリスマス!!」

「お姉ちゃん、それミキのケーキ!」

今日はクリスマス。家族3人でパーティー!

「あたし、ちよつとトイレいつてくるね。」

「早くしてねー。一緒にゲームしよ!」

「うん。わかってる」

そういうとテアはスリッパを履いた。テアはトイレを通り過ぎて、母の部屋に入った。

「作戦開始。」

ニヤツと笑うと物凄い速さで部屋を物色し始めた。

「几帳面な母さんの事だから日記とかつけてるはずなのよねー。っ  
とあった。」

それはちよつと古ぼけた漢字の日記帳だった。

12月22日

ミキの様子がおかしくなってきた。やっぱり都市伝説の影響なのか・  
・《禁じられた時》の人達は何故私達の住処を奪うのか・・理  
解できない。

12月23日

ミキの容態が悪化している。本性が出るのも時間の問題かもしれない。

12月23日

23日にはなにも書かれていなかった。

「禁じられた時？都市伝説？いつたい何のこと？」

テアの頭には疑問マークが浮かんでは消えていった。

「お姉ちゃんーん！早くー」

「今いくー」

(本当にいつたい何だったんだろう・・)

テアはたくさん疑問を抱えながら眠りについたのであった。

\*\*\*

「テア、帰ろうよ!」

テアの友達マナがこちらに走ってきた。

「あ、ごめん。今日寄る所あるんだ。先帰ってて。」

「そうなんだ。じゃあまたね。明日は一緒に帰ろう。」

「うん。本当ごめんね。」

そういつてテアは学校を出た。そしてテアは図書館へ向かった。

「あのーこの町の都市伝説の本ってありますか？」

テアがカウンターの人にそう尋ねると、

「一番奥の棚に何冊かありますよ。」

と、案内してくれた。

テアは一冊の本を手を取った。

「人喰鬼、サーガ？」

人喰鬼サーガとは、夜になると見境なく人間を遅い、切り裂く化け物らしい。普段は人間に化けているが、あるキーワードをいうと、発狂し、理性を失うらしい。

「そのキーワードとは・・・狼・・・？」

テアはますます意味がわからなくなった。その時テアの携帯がなかった。テアは急いで図書館から出て、電話に出た。

「何？母さん？」

「大変・・・大変よ・・・」

電話も先から今まで聞いたことないような母の震える声が聞こえてきた。

「ミキがいなくなった・・・どうしよう・・・もしあの子発狂したら・・・」

と、そこで電話は突然切れてしまった。

「ちよっと！母さん！母さん！」

テアはさっきの母の発狂という言葉に愕然とした。

「もしかして・・・ミキは人喰鬼サーガ？嘘・・・と、とにかく今はミキを探さなきゃ。」

そっくりいテアは走り出した。

「ミキーミキー」

ハアハアいいながらテアはミキのいそうな場所を片っ端からあたった。

「もう・・・どこにいったの？ほんとに。」

「お姉ちゃん。」

ハッと後ろを振り向くと、ミキがたっていた。

「あ、ミキー！どこにいったの。心配した・・・」

テアは言葉を失ってしまった。

そこには刃物を持ったミキと転がる死体があったのだ。

「お姉ちゃんも切り刻んであげようか？さっきの人は根性なかったから。内臓引つ張り出しちゃった。」

「ミキなんで・・・まさか・・・図書館に・・・」

そう。ミキはテアがキーワードを読み上げた時、後ろの席でテアの声を聞いていたのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7543p/>

---

罪人

2010年12月30日18時57分発行